

## 「ひつじ満水」の現場を歩く

理学博士 松島 信幸

御紹介いただいた松島です。宜しくお願いいたします。

今日は話ではなくて、現場を見ないと話にならない、という話です。300年前の巨石はこれだと、そういう事を決めないと話しは出来ない。

想像では出来ない、そういうことで座学でやっても意味が無いので館長にお願いしました。そういう講座だと理解していただきたい。それともうひとつ、この石は何だという疑問が皆さんにも当然有ると思います。それは自分の経験ではこう思うという観察力があると思います。遠慮なく言っていただければありがたい。

私は私自身の物差しで物を決める訳で、皆さんにも日常生活や経験が積み重なっている訳で、私の見解との食い違いは充分有ると思います。そういう食い違いを遠慮なく言ってもらうことが私の一番勉強になるので宜しくお願いします。

### ① 出砂原交差点の駐車場から

現在ここは駐車場ですが、私が子供の頃は何だったか知ってますか？、今から70年位前です。「三六災害」の水害の後、国道153は開通したんですよ。国道のこの交差点、いつ出来たかわかりますか？40年前くらい。国道の管理は飯田の建設事務所ですが、聞いても誰も知らないと言います。「三六災害」の後で国道を開通させましたね。

その雲井橋の所が仮の国道でした。三州街道から下へ移したんです。それは34年頃のこと。「三六災害」で大きく変わりました。国道開通後直後の地形は、私の子供の頃と比べて全然違うんですよ。そこを見てください。ここは元の県果樹試験場です。試験場になる前は山だったんです。

この山は私の家と隣の家の山でした。県道を拡張した時に私の家の馬頭観音が残っていました。県で引き取ってくれたので一個だけ引き取ってあります。

ここは山の入口という事と、300年前の「ひつじ満水」の時、この山は山津波に覆われてはいません。

### ② 歩道橋から



「ひつじ満水」がどこから始まったかというのは歩道橋の東側、今家がありますね。そこから始まったんです。出砂原側に最近出来た家のあるところからです。今そっちへ歩いて行きますけど。それから六地藏までは歩きます。国道や歩道橋は最近出来たものです。

私が子供の頃、このあたり一帯は遊び場だったんです。この一帯が「ひつじ満水」の跡でした。私と同じ80歳以上の人は覚えていると思います。

ここの一帯には大きな石が丘になっていました。「大石」といっておりました。子供達の遊び場だったんです。歩道橋を渡って国道を越えると「大石」の側になります。「大石」が300年前の「ひつじ満水」の山津波の跡です。「大石」の反対側に有る福澤歯科医院の所はそれより前の山津波の跡です。これは縄文時代から弥生時代、さらに古墳時代までに出来た扇状地です。「金部扇状地」です。

「大石」は出砂原扇状地の始まる場所です。扇状地の頭の部分を扇頂部といいます。300年前の「ひつじ満水」で出来た扇状地は南の方向と東の方向に広がっていきます。これらの場所を午前中歩いてみます。そういうわけで私の講座に参加しますと徹底的に歩いてもらいます。何か質問ありますか？

**「私は小学校の時分、ここらが畑だったので畑作りに来たの、当時の川はまるで浅いので竹村医院近所から斜めに畑だったの。」**

上沼さんそれは何歳頃の話？

**「10歳頃だなあ」**

今、言われた通りです。私の家はこの辺に土地が有りましたのでお盆の時のお供え物を大島川へ流しました。天竜川は遠いので、ここでナスの馬など流しました。だから今の大島川は36年の災害復興で造った川です。当時の川筋と



は大きく違った川になっています。

300年前の事では無いですが、私らの子供の頃とは60年間で完全に変わっているということですね。上沼さんが子供の頃の大島川は浅かったが、国の方針で洪水の時、大量の水を流すために設計され、深く広く直したんです。

「ひつじ満水」の300年前は今の地形を考えてはだめです。高森の地形というものは天龍川が400m、小学校が500mですよ。さらに上街道に行きますと600mでしょう、堂所は700メートル、旧市田村というのは400から700の所、ものすごい急流ですよ。こんな急流の川は日本の中ではトップクラスです。天龍川は日本の大河の中でも一番の急流河川です。その中でもこの大島川は10倍から30倍の急流河川箇所です。そういうことを頭に入れて置いて下さい。又、県道市田橋一市田停車場線は上るときは気が付かないですけど、下るときはブレーキをかけなければ下って来れないでしょ。そんな道路が主要道路として縦貫しているのは高森町だけとは言いませんが下伊那の特徴です。

上伊那に行けばちょっと変わりますから。

**「先生、出砂原のこの部分に、住民としては下市田の人だけれど、吉田という地番がありますね。」**

それはね、吉田と下市田の境は出砂原の中を通っていて、住民票もそうになっています。それは「三六災害」の時では無くして300年前の地形をほぼ踏襲しています。だから町長さんの家は吉田ですよ。出砂原のお祭りを一緒にするでしょうけど、それは吉田の人間と一緒にするだけのこと。

**「出砂原というのは300年前からその地名だったんですか？」**

そうです。300年前に砂と礫が此の扇状地を造った訳だから、当時の人は頭が良い、流れ出て来た礫の扇状地、つまり原っぱを造ったから出砂原という名前を付けた。その前にはその地名は無いですから。砂とか石、「大石」という地名があるくらいですから石と砂で出来た土地です。

**「じゃあまた大雨が降れば流れるということ？」**

普通の豪雨と出砂原を造った「ひつじ満水」豪雨とは次元が大きく違います。

### ③ 歩道橋を渡り「大石」へ

それでは歩道橋を渡ってその向こう側の竹林が見える方面は<sup>きんぶ</sup>金部(下市田二区金部常会)って言うんです。金部扇状地へ移ります。ここは大事なところですよ。

国道が出来る前は金部扇状地と出砂原扇状地とは「大石」で繋がっていたんです。

金部扇状地へは大島川からの水を取っている水路(用水路)が有りますね。この水路は国道で切断されました。今の水路はサイフォンになっています。もうひとつの水路である竜西一貫水路のサイフォンも有るんですが、それらの水路は、その向側へ行くと見えます。国道東側地域のことを私たち子供の頃は「大石」と言っていました。「大石」とは何か?つまりどでかい石が丘をなしていました。小屋程の石が丘を造っていました。

そこで何をしたかという戦争ごっこ泥棒ごっこです。やんちゃ坊主が思い切り暴れるには最上の場所でした。今は大石の面影が無いですよ。石屋が、毎日石を割って石材を造っていました。

その大きな石は300年前、大島川の奥、不動滝の直下やその上流から流れてきました。山津波となって。山津波の先端を走ったのは大きな石なんです。砂や礫はその後に続いて流れて来ました。山津波となって。ここへ来て、出砂原の扇状地を造るわけです。歩道橋を渡る時見ながら行ってください。

**「先生、山って福澤歯科医院よりもっと高かったの？」**

いや地形は変わらない。竹村医院の向こう側一段高い所がありますね。あそこの地名は<sup>せいとう</sup>清東といいます。あれは縄文時代とか弥生時代の扇状地です。だから古いんです。振り返って奥の方に家が沢山見えていますね。小原です。あれも私の子供の頃は家が一軒もありませんでした。全部雑木林でした。小原の突端に役場が有りますね、その上に中学校が有りますね。これらも大島川の扇状地です。300年前よりずっと古い扇状地です。役場の所に地震計が有りますね。高森の地震情報は周りの町村より1度高いですよね。それだけ揺れるって事です。扇状地ですから強く揺れます。松川町より飯田市より揺れます。揺れるということは地盤が



弱いこと、つまり新しいってことです。でも300年より古いです。

この向こうに新井動物病院って書いてありますね。あの病院は私らの金部扇状地です。つまりどういうことかといいますと、そこから出てきた水路が下をサイフォンで来て、あそこに白い小屋みたいなものが見えますけど一貫水路のバルブが有ります。金部扇状地には田んぼが有りますが出砂原には田んぼは有りません。300年以降の土地利用が全く違うんです。

歩道橋からここを見ますと国道の両側で高さが同じに見えます。出砂原をつくった扇頂部分は大きな石が重なっています。山津波の先頭を走ってくる巨大



な石が浮いてきて、扇頂部分に積もります。それは「三六災害」の時に各地で幾つも見ました。扇頂部で巨石が止まっても、砂や礫はそこからさらに下流、天龍川に向けて流れていきます。巨石が積もった場所がこの地域ですが、今は家が建ってしまい殆んどわかりません。もう少し歩くと、その変化がわかります。

大島川から引込んだ横井(井水)が国道の下をくぐって金部側へ出てきます。その所で横井が分水され、分かれて流れて行きます。

歩道橋を渡ると井水に面した家々は地形的にゆるやかな尾根みたいな所を歩きますね。途中から六地藏へ向ってゆっくり下っている坂道へ下ります。

出砂原は昭和30年頃、下市田二区から分かれて下市田6区として独立しました。大正12年に市田駅が出来たんです。今から90年ばかり前ですね。それ以後、出砂原が急激に商業の街として発展するわけです。急に人口が増えてしまうんです。だから下市田2区では人口を抱えきれないから独立しましょう、ということで下市田6区という新しい地区が出来たんです。



ちょっと耳を澄まして下さい。これは水の声。どこから出るんでしょう？。向こうの国道の方から流れてくる水です。これは一貫水路の水です。下市田2区や3区の所謂市田田んぼの灌漑用水です。今は天龍川から取っていません。その取水口は洪水のたびにやられちゃいますから、中川村南方(みなかた)の発電所の余り水を使って天龍川の下をくぐってここへ流れてきています。

あそこにバルブの有る小屋が有るんですが、動物病院のところですよ。そこからこの窪地へ暗渠で流れてきています。この地形を利用しています。

#### ④ 台持洞へ

ここは台持ち洞といいます。惣平堤防を造った石を運び出した場所です。豊丘の伴野側の人に知られてはいかん、ということで静かにやったりとか、夜引いたとか伝わっていますが、それはどういうことかといいますが、ここから大きな石をそりをつかって運んだんです。そりを滑らす為に青竹を敷き詰め、その青竹が線路の役目をします。それを皆で引っぱるんですが、一旦加速するとブレーキをかうほうが力がある。そうやって今から200数十年前にやった跡が今でも残っています。

子供の頃、「大井」とか「小天龍」と言っていた市田たんぼの井水はこれから下へ行きます。この道は昔から有った道で、そこは畑でした。何も作物が採れないような畑でした。最近は全部住宅地になっています。

この水が市田たんぼ50町歩を潤したんですよ。この暗渠が、いつ何が起こるか、というのはメンテナンスの面で心配です。これだけ割れ目が出来ていて暗渠が老朽化しているのです。元々この場所は最初から少し低かったんです。逆に六地藏の方が少し高かったのです。

ここが六地藏です。六地藏の前の道が「町道田村線」です。どうして高森町の中に田村の名前があるのか？これが重要です。今でこそ30キロ制限のすれ違いの出来る1.5車線の幅になっていますけど、それより前は細い道です。もっと前は小さな畔道程度の歩道でした。その道を竜東方面から大鹿、生田方面の人達は全部田村線を使って元善光寺を経て飯田まで向かっていたんです。

ここに私の同級生小林さんの家が有って低かったんです。絶えず水が出ていました。湧き水が。今でこそこういう新しい家々が出来上がったんですが。

#### ⑤ 六地藏へ

今の六地藏は300年前に流れた地蔵とは関係ありません。300年前にあった六地藏は「ひつじ満水」で流れました。でも、言い伝えによれば、一体の六地藏が見つかったので、それを大きな石の上へ祀ったのが「出砂原の大石」だと伝えられています。これから行く「出砂原の大石」の所でその一体のひとつが見られます。今の六地藏は300年前の洪水から、125年後に再建されました。でもここには六地藏が元々有ったんです。何のために有ったのか？これが大事です。この所がちょっと丘みたいになっていたんです。県道の方へ道が下っているんですが、元はもっと下っていました。反対側は松下歯科の方へと下って行っている。ここがこんもりとしている。今でこそ新しい道になって昔のことがわからないが、私達は言い伝えから判断できることだけで、「出砂原の大石」の六地藏は今の北部タクシーのあたりに有ったらしいです。



「先生、大石の上に乗せられたのが六地藏だという話が有りますが・・・」

それは文書として書いてないので、言い伝えではそうなっているということですね。大石の六地藏は今の北部タクシーの辺りに有ったらしいです。それは一つだけ流れた中から拾い出したというんです。ではここは、どんな場所だった

のか？ここは無縁仏が有ったということ先祖から聞いています。無縁仏って何だというと、さっきの田村線です。大鹿方面、生田方面、河野方面、神稲方面の人、皆なの通路でしたから当時の道は厳しかったと思います。それで行き倒れ人が結構居たらしいんです。で、その人達を葬るとか焼くとかして無縁仏が有った。そういう人達の霊を祈願する為に、「ひつじ満水」以前に六地藏があったことは確かでしょうね。

私が赤石の登山に行くためには大鹿の知り合い家に泊めてもらうんです。そこのおじいさんがまだ生きていて、郡の役員をしていて、しょっちゅう飯田へ行かんならん、峠を越えて下って来て、天龍川に渡し舟が有って、六地藏の前を過ぎると私の家の直ぐ下に北林家という今は無いけど豪壮な家が有って、市田にはこんなすごい家が有るんだなあと驚いたと私に話してくれました。その畔道を通って二区のお荒神に出るんです。そういう道が有ったんです。それが今の「町道田村線」っていうんです。

**「先生無縁仏が伝っているのは大体、村はずれの境に墓地を置いたと？」**

そうですね、供養塔も無く。馬が死ねば尽してくれたと馬頭観音を建てますね。

## ④ 三界万霊

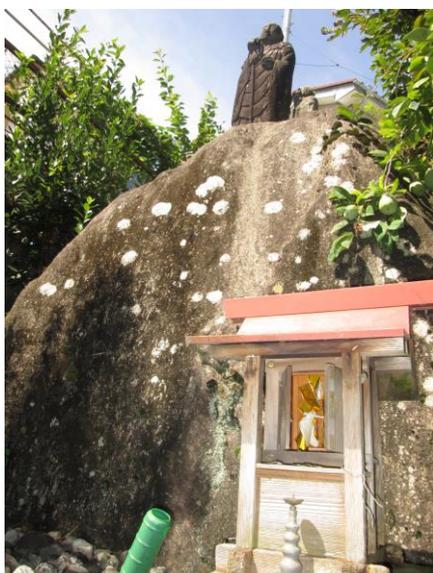


六地藏に三界万霊が有りますが、「ひつじ満水」の記録として、この碑は多くの人達の霊を弔う為の碑ですね。そのためにあんな立派な碑が有るんですね。これは「ひつじ満水」を記録した大島川の流域で唯一の物だと思います。「ひつじ満水」を記録した物は少なく、飯田藩では有るのでしょうか？言い伝えは有りますが・・・誰か見つけたら教えて欲しい。山吹藩には記録が有りますが、大島川は山吹藩ではないので、胡麻目川から向こうの山吹藩の記録はあります。それは有名なんです。

飯田藩は広い藩ですから分かりません。野底川の「夜泣き石」は言い伝えは残っていますが、言い伝えをどこまで信用するかというのは、地質や地形をきちんと認定しなくてはだめです。ただ、大きな石が出た、砂が出た、だからこれは何時の洪水なんて勝手に決める人はいっぱいいます。勝手に決めるのを否定はしませんが、その物証、年代を決めることは非常に重要です。年代を決めないことには歴史は一步も進みませんから、そのことだけは皆さんも注意して下さい。ではなんで年代を決めるのかということ、直接記録されたものが一番有効です。もうひとつは遺物、文化財です。石器、土器、古墳時代の色々な文化財。古墳が残っていれば「ひつじ満水」を受けていません。一番分かり易いのは古墳です。ところが最近、古墳は殆んど壊されてしまっています。残っているのは本当に少ないです。私の家のまわりには小川昌成先生が記録した古墳が十数個有ります。

三界万霊はあれだけの立派な石碑があるのに文書が無いというのはおかしいなあ。昔の人に文句言うわけにいかんなあ。ですがあの横に書いてある小さな字を春日先生が読み下してくれたんです。この字の原文は高森町史に記されているが、難解で、全然意味が解らないです。仏教的な専門用語が使ってあって解らない。皆さん手元の資料を見て下さい。残念なことに年号不明と書いてあります。ですが小さい文字を読んでいくと、これは「ひつじ満水」のことを記しているということは解る。

春日先生が読んだのを読むと、正徳5年1715年6月18日、山も谷もふちも崩れ、墓地は水に流されてしまい、墓地というのはこの無縁墓地です。水没した墓の跡に残ったものを集め一つの丘を造って弔う、と書いてありますね。そうすると私が子供の頃に聞いた話と合います。だからこれを造ったのは安養寺の2代目の和尚と書いてありますから。



最後に、どうか縁のある者、亡き者も、皆均しく仏の利益を蒙ることが出来るよう願うものである、と書いてありますが、その通りであるかどうかは原文を正しく読める人がちゃんと読んでくれればまた違う読み方もあるかもしれません。しかし簡単に言うと結論は「ひつじ満水」の霊を弔ったのが三界万霊です。

人間の霊は勿論ですけども、動物の霊も含めてというような意味だと思いません。仏教の精神ですから。何か付け足してもらうことありますか？

**「先生、あの石は未満水の時に流れた石を使っていますか？」**

はい、多分そうだと思います。全部花崗岩です。花崗岩も種類がありまして、これは不動滝を造っている花崗岩と同類です。この花崗岩は工作し易いんです。大体7,000万年位前に出来た花崗岩で、比較的新しい花崗岩です。これもあれも同じ石でしょ？同じというのは鉱物の粒が揃っているから石屋さんが加工し易い。反面、風化しやすいから長い年月がたつと読みにくくなる。

## ⑦ 市田駅～「出砂原の大石」

大正12年に市田駅が出来た。続いて駅前商店街が整備された。私が子供の頃、70年前頃、駅前にカフェーがあったが知っていますか？、女給が居て、夜になるとネオンが点いて、子供が近寄ってはいけないような雰囲気があった。それから隣に「山三」の百貨店、榊原、酒井百貨店、北原の魚屋等。

300年前、この辺は一面に石の山だったんですよ。その地形を駅と同じに平にした。「出砂原の大石」は榊原商店の裏へ引きずり下された。今は商店街の裏を回りますと「出砂原の大石」へ行けます。

大石はすぐ上の北部タクシーの辺から下したとの話が残っていて、その人の名前まで書いてあります。石の上の大きなお地蔵は言い伝えによれば、「ひつじ満水」で流れ残った六地蔵の一つとだいいことになっています。小さいお地蔵は泣き声が聞こえるというので、上郷の石屋さんが可哀想だと子供の六地蔵を寄進したら、夜鳴きが止まったという言い伝えが有って、本当のところは伝わっていないところが人間の歴史の欠点ですね。

### 「先生の見た大石ってこんなような石がいっぱい有ったんですか？」

勿論こんなような石や、もっと大きな石が「ひつじ満水」で流れてきています。何回もの大きな山津波が積み重なって、下市田から上市田やもっと上段の扇状地が出来てきたんです。そういう歴史の積み重ねが現在の地形なんです。300年前というのは土地の歴史からすれば、極めて新しく、昨日のことなんです。

300年前の大災害は「三六災害」の災害とは違います。「三六災害」の時は出砂原の天竜社から吉田河原まで砂で埋まりましたが、「ひつじ満水」では大きな石で埋って出砂原の扇状地が出来ました。「ひつじ満水」は山が大きく崩れて、巨石が大量に流れてきましたが、「三六災害」の時は大雨で大量の砂が流れて来たんです。

## ⑧ 松林の丘

市田駅の下に、松林の丘が有りました。今、その付近は住宅地になっています。住宅街は最近です。松林の北側には福島歯医者有りました。

私が子供の頃、ここに来ると松林と大きな石の丘が有って、丘の松は今の住宅地の家より高かったです。遊び場としては格好の場所、綺麗でしたよ。駅前から明神橋へ下って行く道沿いに出砂原商店街が出来ていたんです。

「ひつじ満水」で出来た巨石の丘は一箇所だけでなく、二つ以上の丘を造ったでしょう。たぶんそれは大きな山津波1回じゃないということ。数分置きとか、時間差を置いて何回か繰り返して来た。それは出砂原地区だけじゃない。これから行く大島川の上の方でも見れます。

山津波というのは規模が大きいということ、複数発生するということですね。出砂原の中央にも松林の丘が有ったんだということは私の話だけでは信用できませんので、是非写真を見つけてください。ここにすごく綺麗な松林の丘が有ったという写真が必要です。駅が出来る前の出砂原には殆んどの人が住んでいなくて松林だったんです。明治の始め頃、天竜川には橋が無く、渡し舟が有ったんです。渡し舟は田村側の人が経営していて、私の家に残っている明治14年の渡船賃金額では、人一人七厘と、牛・馬一匹壱銭五厘と、馬のほうが人の2倍以上高かったです。さらに、渡し舟では不便だということで田村の人が頑張って吊り橋を造りました。その橋の渡し料を取っていました。その次に鉄の橋が出来ました。今の橋は3代目になる。それでは移動します。



## ⑨ 北条遺跡を発掘した

児童公園の横に線路を渡ってはいけないという標識があります。これは昔からの赤線です。六地蔵の所で一貫水路の水の音がしましたね。あの水路の続きはここへ来るんです。敗戦の年から4年後、ここに森永工場が出来ました。今は南信酪農組合の倉庫の所、その敷地を造るために地面を少し掘り込んで整地をやったら、私の弟が中学3年頃か、電車に乗って飯田中学へ行く時に工事を見ていたら、何か遺跡が有ると気が付いたんです。早速調査したんです。そしたらそこから住居跡、井戸の跡、つまり人が住んでいた跡が有った。古銭がいっぱい、それから大小の陶器が出てきた。陶器の年代でその住居を使っていた人達は中世末の人達だということがわかった。だから戦国時代が始まる直前です。発掘で確かめた集落はたった2軒だけです。井戸は低い位置に有った。さっきの一貫水路の延長です。その向こうは大沢さんの畑であった。大沢さんの畑には古木が茂っていたと。その線路の向こう側には広瀬の紬屋があった。その紬屋と、もう一軒家が有って、それを北市場といったらしいんです。出砂原の北にあるから北市場。でももっと古い地名は北条といいます。下市田の一番北の区域。私が子供の頃は砂と石ががらがらした畑で不毛の場所でした。そういう所は「ひつじ満水」の跡です。「ひつじ満水」によって中世の住居地が埋まったということです。「ひつじ満水」でこの辺は完全に河原になったよという証拠になるわけです。一つ一つ証拠をつぶしていくことで、どこまでが「ひつじ満水」の所だという決め手になるわけです。

では「ひつじ満水」の扇状地がもう少し南まで続いているかというのをこれからさらに歩きます。

ああ、あそこが惣平堤防ですね。この道が昔の赤線。五、六百年前の古い扇状地はこの辺。段差が有るのでわかります。その段差はさっきの動物病院の所まで続いています。続いているということをお今日歩いてだけで理解するのは無理でしょうけど、隈なく歩けばわかります。地形地質調査というものは歩くことが第一歩です。

ここは家の昔の祖先が壊した古墳の名残の石です。さらにもう一つの古墳跡へ移動します。古墳があるのは「ひつじ満水」より古い扇状地だということです。

## ⑩ 古墳～天伯の森あと

ここは飯田線の塚踏切です。塚というのは古墳です。電車が通るということで塚を半分壊してしまいました。だから石室は壊れてしまいました。半分はあちらの家が建っている方に残っています。森永の辺は「ひつじ満水」、ここら一つ前の大津波が造った扇状地、ここからでかい石が出たからひつじ満水だなんて短絡的に思わないで下さい。塚が有れば「ひつじ満水」より古い扇状地です。でも塚が自分の所に有れば勝手に壊してしまうんですから残念です。国道153号線を造った時も塚が有ったのに壊してしまっただ。皆平気で壊してしまうのに文化財課は抵抗できません。

久保田写真館の裏の窪地で私が子供の頃から有りました。人が埋めないで今も残っています。この窪みは線路まで繋がっています。人間がこんな細い窪みを掘りっこないんです。ですからこの窪みは自然の地形です。この窪みまでが下市田村、ここから北側は吉田村とみてもいいのではないかと。厚生病院は吉田側になります。

病院側はちょっと掘り込んでありますが、ここに昔何があったかという、野球場を造りました。自然の階段状に掘り込んでありまして、子供の頃野球を見ました。今より盛んではないけれど全部ジャリです。バックネットの記憶は残っていません。その時にもうひとつ開かれたのが競馬場、競馬をやっていました。私も運動会を見に来ました。その野球場の跡が天龍社です。それが埋まったのが54年前の「三六災害」です。

天龍社に高い塀が有って、夜になると下市田の青年衆が来て塀越しに女の子たちを呼んで・・・盛んでしたね。それから昔の図面を見てわかったんですけど、そこに天伯があったんです。天伯の森とありますが、その森は古墳だったんですが、道を造るために無くなってしまいました。

## ⑪ 川底

ここは皆さんが納得するかどうか難しい場所です。どういう点で難しいかという、と、「ひつじ満水」と関係あるんだろうと考えた理由は、ここは地籍を川底というんです。川の底っていいんですがここは川の底でしょうか？今の太島川がどこを流れているかという、と、県道の北側に有る建物の向こう側、県道より一段下側を流れていますよね。だから現在は川底ではないです。でも300年前にここが川底だったと仮定すれば、向こうの、現在の太島川の河床は300年の間に掘り下げた河床です。いいですか？掘り下げたということは侵食したということです。侵食したということは、川底は「ひつじ満水」のあと隆起してきたといえます。つまり、出砂原の交差点付近は侵食ではない。「ひつじ満水」やそれ以前から堆積作用によって扇状地が形成してきた。今の太島川は「三六災害」後の復旧で河床を掘り下げている。安全を確保するために川を深くしたんです。

川底は出砂原とは違っている。そういう所ではない。じゃあどういふ場所かという、と、役場や中学校が有る段丘、つまり小原ヶ丘と下段の出砂原・北村・金部の扇状地と違って川底は一段上がっています。上がっているということは何の力が働いているかという、と活断層が有るということです。活断層の上側は河床低下、つまりどんどん掘り下げっていきます。掘り下げれば川底のように太島川の河床が侵食されます。ということで活断層を確認できればよい。確認出来ていませんが地形的にはそう読めるんです。活断層の確認には地面を掘らなければなりません。個人では出来ません。ですが、隆起していることは確かです。向こうに大丸山が見えますね。あれは天龍川が運んできた礫層から出来ているんです。つまり、太島川による吉田山や本高森山の礫層では無いんです。200万年位前の礫層です。つまり、現在の天龍川から高森町全体の地形が出来る前の扇状地ということです。地層を調べることで大丸山の成因が分かります。どこから供給された礫層であるか調べて礫の古さが分かります。単なる丸い石を見てこれは何十万年前の石だということも慣れてくると分かります。60万年前、80万年前位は分かります。礫も何年も立つとそのものが風化してきます。泥でできた泥岩はもっとも風化が早いです。火打石、つまりチャートは余り風化しません。風化はしないですが中は変化します。そういうのを見て行けば何時の礫層だということは大体確認出来ます。

元へ戻りますが、ここは川底という地名です。この地名は出砂原と同じように「ひつじ満水」によって発生した地名ではないかということです。つまり、「ひつじ満水」の跡の地名です。「ひつじ満水」によるさらなる地名として農協から上に日陰があります。日影にも水田が有りますが、それを拓いた人達は1区の北村の人達です。例えば川底の中村家です。中村家というのは松岡氏時代の御三家のひとつですね、旧市田村の中で一番古くて位の高い農家です。そういう意味において中村家の土地は「まめくり」の向こうに竹藪が有りましたね。あの竹藪は今でも中村家の土地です。最近雑草が茂ってきましたが、中村さんの家は100歳のおばあさんですか



ら、自分では出来ないから公共事業で竹を全部伐採してもらったんです。「まめくり」の土地も中村さんの土地。だから300年以降に開拓して水田を作ったのです。

農協の上は大体1区の人達の水田、下は日陰の久保田さんの水田ですから、同じ日影でも久保田さんの方は新しいです。新しいということは大体元禄の時代です。だから中村家は中世ですから、歴史的な過程と土地の過程を組み合わせれば色々なことが分かるということ。何か付け足しや異論がありませんか？

300年前に出来た地形はまず出砂原、それからこの川底、日影、その上が石原です。私は山とか川とか石とかいざかり見ていて人間に対する認識力はまるでだめです。人の歴史については大変不勉強です。

**「先生、大きい石がどんどん流れて来て、小石は侵食されたが大きい石は割合侵食されず、川が段々下がっていったと考えて良いんですかね？」**

そういうように決めるにはちょっと違う。「三六災害」の山津波は何人もの人が見ているんです。一番それを見ていたのは旧中沢村、今の駒ヶ根市です。その人達は実際山津波が襲って来るのを見ているんです。

あれは6月26日の夜、夜ですから回りは真っ暗です。山津波の巨大な石は全て先頭を走って来るんです。しかも浮いて来るんです。これはすごく迫力があります。それがどうして見えたかということ、石と石とで火花を散らすんです。ある程度急勾配を下って来ると、勾配が変わる。出砂原の交差点の同じような場所です。そこで大きな石が落ちるんです。大きな石の次に走ってくるのが砂と礫です。それが大きな石の間をすり抜けて下へ流れ下って行きます。大きな石の堆積物が丘を造ります。そして扇状地として広がります。傾斜が変わります。その丘が「大石」や福島医院の所に有った「松林」です。「石原」もそうです。大きな石はそこで落ちます。抜けた砂や礫はさらに下方へと広がります。

川底の北側、大島川の左岸側の土地には「三六災害」後に開発された新しい住宅が並んでいます。その住宅地もちょっと掘るとでかい石がいっぱい出てきます。この辺の家の庭を掘ると石がいっぱい出てきますが、これだけ見てもいつの洪水で流れてきた石なのか分かりません。ですが、大島川上流の山から流れて来た石です。その石は花崗岩です。岩石の中でも一番軽い花崗岩です。比重が約3、泥水のほうが比重が大きいので石はみんな浮いちゃうんです。私、びっくりしたんですけど、中沢へ調査に入ったら「三六災害」の時は6月ですから、水田の稲が青々と育っていました。そこへ土石流が流れてきます。その先端へ行ったら稲はそのままでその上に大きな石が座っているんです。つまり、上から落ちるだけです。石というものは軽いんだとそういうように理解してください。こんな急勾配を下るのは伊那谷だけです。JR東海はこういう谷を残土で埋めれば良い土地が出来るでしょうと言うんです。危なく、無責任なことを言ってます。そんなことをして、後どうなるんですか？誰が責任持つんですか？

県だって同一犯ですよ。実際こういう山や川を見ている者にとっては、自然というものはどうやって形成してきたかということをおちゃんと理解しないと、今、土木が進んでいるから何でもやって良いと、そういう事とは次元が違うということです。何十年先の事を考えなきゃだめということです。これは余談ですがそういうことを少しでも理解していただけでも嬉しいです。

皆さんの意見は簡単にいうと素人の意見ですよ。しかし、そういうのが私たち一番役に立つんです。物を知っている人の意見は偏ったものになる。素人の意見は重要です。川のそばの人は夜中にコトコトンという石が流れる音を聞いただけでも眠れないですね。

## ⑫ 久保田家前～避難場所へ

元禄の時代にここへ居を移してきた久保田家の墓です。久保田昌幸さんのお宅はここになりますが、本家別家という久保田家の昌幸さん宅は別家になります。元禄の時に来た久保田家とは別に、農協近くの久保田家は明治24年(1891)に発生した日本最大級の濃尾地震で移住してきました。高森町には、この時に移り住んだ人達が4家族もいました。久保田家の本家は祖先が事業に失敗して出砂原へ移った、その屋敷がこれです。



久保田昌幸さんが子供の時、<sup>ひいおばあ</sup>曾祖母さんから聞いた話、ここが未満水に遭

って危なくなった、で避難したと。あっちに見える梅畑の奥の大丸山の下へ避難したと。そこでしばらく仮住まいした。そこで飲水を得て、しばらく暮らしたかどうかを私は調べました。結論は可能です。昔の人は文字が書けないので文書が残っていませんが、そういう時代におばあさんから次のおばあさん、次のおばあさんと伝えていきます。男はだめ。ここは男の人が多いけど、女の人はその家の大黒柱になりますね。お宅はどう？主婦のことを山の神というけれどお母さんは山の神であり、水の神であり、田んぼの神でもあるんです。田んぼを作るには水を引かなければならない。その水は上の石原から入れている横井です。私の家の方迄来ています。冬季になると一貫水路が止まってしまう。私は時々石原まで水を掛けるに来ます。そうしないと家まで水が来ないんです。

これから旧久保田家の本家の屋敷を見て通りますね。そこを歩いてあそこに携帯電話の基地を越えて仮住まいした山麓へ行きます。そこで長靴が必要になります。大丸山の北がずっと崩れたんです。振り返って見ますと久保田さんの家が見えます。あの樫の木が大きいでしょ？久保田さんに聞いたら、久保田さんのおばあさんが嫁って来た時に植えたそ

うです。曾おばあさんの時は久保田家は有った。製糸会社をしていたんですよ。辞めて組合立の天龍社となった。製糸会社は山吹の大沢の羽生さんの所にもあった。大丸山の下にちょっと水が流れていますね、久保田さんが言ってました。出砂原交差点にかまぼこ型をしたタンクへ引っ張っていったと。湧き水でもタンクへ蓄えるから。大丸山の下のどこに仮小屋を作ったのかはわかりませんが、このあたりの台地だと思います。

### ⑬ 大丸山北斜面

この上が今大丸山の団地になった所で、この上に久保田さんの畑が有ります。この一帯は崩壊地です。崩壊地だから土砂が裾へ溜まるんです。そうすると雨が降ったりするとじくじくした場所です。下から水が湧き出るんです。ちよろちよろですけど十分流れていますね。こういう所へ住むには昔の人だったら平気。ここだったら少し高いので洪水がここまでは来ないだろうという経験です。これから行く石原、あのあたりに逃げたら絶対だめですよ。あそこは狭いですから。そういう判断能力は昔の人は今の人よりはるかに強いです。現代の人はお馬鹿さん。インターネットに書いてあることは皆な本当のことだと思ってしまう。そういう人達が今の世の中を創っている。情けないです。

久保田さんの田んぼは農協の下で坂畑ですね。後から移ってきたので坂しかもらえなかった。家はここへ作りなさいと言われたのかもしれない。でもそれは私の想像です。久保田さんから聞いて役に立ったことは、久保田さんの先祖がここへ仮の小屋を作って安全だなあと思うまで暮らしたということ、それを曾おばあさんから聞いたと、子供の頃おばあさんから聞いた事というのは、80になっても90になっても覚えているものです。そうするとまた次の時代に伝える。そういう伝統が今はだめになってしまった。ネットの情報が正しいと思っている人が多くなったのが今の世の中の姿ですよ。

### ⑭ ひょうたん堤～石原



町史にある豆田、これがそうかもしれません。少し前に、高森南小のスケート場にした水田です。その近くに舟石という大きな石が有ったんです。この石原の道を拡幅する時にどでかい石が出たと。そしたら翌日行ってみたらもう割られていたということです。もしかしたらそれが舟石かもしれない。(後日談：割られた石は丸い石だったとのこと)

舟石というのは山津波が持ってきた石であちこちに有るんですけど、石は細長くて大きいです。舟の形をしています。だから舟石というんです。あと、ここに昔からの田んぼが有りまして、田んぼの上に土手が有るんですが、これは堤の土手です。あの上にひょうたん堤、昔はひょうたんと言わなかったんです。

堤は地理的に下市田の最上部、地理的に一番上でここから下が下市田になります。ここから上は上市田になるんです。今の農道あたりが境目だと思ってください。ひょうたん堤で私ら子供の頃は怖いと言って近寄りませんでした。つまり複数の人が入水自殺をしていることは確かなんです。自殺の名所で、夜になると幽霊が出るといわれました。私は人魂を見ました。人によって見える人と見えない人がいる。ここは今でこそ広がっていますが、昔の県道はもっと狭かった。ここは夜になると幽霊が出るから人通りが全く耐えてしまいました。今は新興住宅地が有りますが、勿論家は一軒も無かった。市田橋まで一軒も無い。そういう時代が少し前までありました。・・・ではこれからひょうたん堤へ行きます。

石原集会所とありますがこの地区が出来たのはつい最近のこと。36年の水害より後ですよ。この大島川の右岸側を石原といいます。皆さん、ひょうたん堤って初めて来ましたか？ここは浅いから入水するには袂に石を詰め込んで入るの。こっちは大丸山です。ですから大丸山の農免道路までは下市田なんです。この堤と向こうに間が沢の堤、牧の内もそうです。堤が下市田の最上端です。だから村の一番高い所へ水を溜めて田んぼを維持するという仕組みです。もう一つ堤が有ったが壊してしまった。ひょうたん堤の南側は大丸山の最上部の斜面です。大丸山と石原に挟まれた窪地だったから、土手を造って堤を造ったわけ。松岡の時代よりもっと後です。

その時代、下市田はそんなに開田が進んでいません。だから中世末の江戸時代との初期、その頃に今の水田が開けている。昔の地図を見たら石原山となっている。田ではなくて。セブンイレブンの駐車場の道路下から市田井の水がとうとうと流れている。落とし水といって牛牧の方で使った水を大島川へ流さず、必ず下市田の方へ流せという決まりがあるんですが・・・それは当然ですね。不動滝から流れる水の権利6割を市田村が持っていたんですよ。一貫水路は生田の発電所から水を持って来て、一貫水路によって田んぼの水はかなり間に合うようになったから、昔から持っていた下市田の水利権を半分にして、後の半分で高森町営水道を作った。大島山の不動滝の下の方から取水して町営水道が出来ました。

私の弟が蔵から見つけてきた物の中に水番の当番表というのが有りました。線香が一本燃え尽きるのを時計代わりにして24時間水の当番をした。風が有る時と無い時で線香の燃え方が違うので、斗拵の中へ線香を立てて、その線香拵が牛牧に残っていると聞いたので是非探して欲しい。広域農道から上は原町、つまり、上市田は牛牧や下市田から分離した。牛牧というのは山が沢山あって強いんです。今はどうか分からないけど、一番苦労したのは市田小学校を造る時

に最後まで反対した。飯田藩の命令で牛牧の山を座光寺村で使わせて欲しいと。大島川に沿った座光寺の人の果樹園は昔殆んど牛牧のものだったと聞いている。松岡城があったから牛牧は強かった。今も気性まで違う気がする。一番可哀想なのは出原の人、山吹に取られてしまったから。要するに座光寺藩に大半は持っていかれてしまった。一番感じたのは、山吹地区を流れる田沢川、あの川を調べたんですが、座光寺様の御用水は別として水利権は出原です。出原の余り水を山吹に戻した。座光寺家が松岡家を叩いたことに対する怨念はすごいものがある。その怨念の間に立ったのが出原の人達と感じました。

子供の頃、三州街道又は伊那街道といっていました。これは明治になって飯田藩は徳川方だったんですが、明治政府から徹底的にやられました。どっちが正しいとか悪いとかはあるでしょうが飯田城は壊されました。飯田藩の赤門だけは残って居ますが城郭の中は殆んど残っていません。その飯田藩の城郭の石を使って谷川へ橋を架けた。通称「めがね橋」。「めがね橋」の下はみんな丸いです。城郭を造っていた石です。どうしてあの橋を造ったかという、三州街道を作るためです。何の為に街道を作ったか？江戸の時代は終わり、公道は馬が引く荷車を通さなければならないと道幅を広め、川には橋が必要になりましたので「めがね橋」を造りました。

大正6年頃、飯田線は高遠原まで通じました。当時の高遠原の駅は乗り降りがとても盛んでした。高遠に馬間屋がありまして、今でも本棟造りの家があります。間口10間奥行き10間こんな家は上伊那にも下伊那にも有りません。最大でも8間、高遠原はもともと人が住んでいなかったんです。前沢川の氾濫で田畑や家が流れ、そこにいた片桐村の人達が安全な所へ行こうと移ってきた人達が高遠原や七久保地区へ上がったんです。

七久保駅の周辺を新田といいます。新田開発というのは江戸時代初期、その新田開発をやった人達は天龍川の理兵衛堤防を造った人達。人々は上の方へ行かなきゃだめだということで七久保の新田という集落をつくったんです。土地の開発と水は切っても切れない。古い集落には必ず水路があります。水利権の成立した水路です。新興住宅地には水利権は無いです。土地の成立の順序をみるためには非常に重要な問題です。つまり、江戸時代より古いか新しいかということ。

## ⑮ 市田橋から～鬼の手見童公園へ

市田橋は大島川に架かる橋ですね。橋の南側は牛牧で、北側が大島山、県道の下側は橋の南側が上市田で北側が吉田、つまり、高森町で4つの村が交差している場所としてここが唯一です。「ひつじ満水」を調べて上ってきたら農家のおじいさんがいて教えてくれました。

これから不動滝線に入りますがあの両側の家は牛牧です。セブンイレブンの上に用水路（市田井）が有りますがそこが牛牧との境です。ここは天白児童公園です。この近くにモーテルの予定だったが児童という名前を付けてその開発を防いだんです。児童という名前を付けると、その500メートル以内はいかかわしい開発をしてはいけないという法律があるんです。それを利用してこういう遊具を作ったんです。この土地の人達が声を大きくして役場を動かしたという結果です。

この道は昔から瑠璃寺へ行く主要道路です。信仰の道ではなくて牛牧学校というのがそこです。今はラグビー場です。牛牧学校へ大島山の子供たちはみんな通うんです。だからこれは通学路です。最近道路を拡幅して、「鬼の手石」という有名な石はここに有りました。拡幅のじゃまになるということで、重機で吊り上げてここへ移したんです。

### 「何トンくらいあったの？」

私が計算すると約30t、

### 「以外と軽いなあ」

以外と軽いですよ。山津波でこれが浮いて来るんだから、花崗岩です。この岩石は野底から始まって上伊那の方まで行っています。この花崗岩は石材には良いんです。節目が無いので加工するには適していますが、その代わり弱い。その石の上に穴が開いています。これは人間が作った穴では無いです。この穴に雨水が溜まります。私が子供の頃は栄養のせいだかイボが出来ます。この水に付けてイボを洗うと治るといいます。だからこれを「イボ石」とか「イボ神様」といいます。大島山の大洞紀元さんがこれを「鬼の手石」というのはけしからんと。「イボ石」というんだと言っていました。天龍峡にもイボ石が有りますが、ここには神さまを祀ってあります。

この石は大島川から流れてきたんですが、3本の窪みがあり恐竜の足の形と同じです。私が子供の頃、遠足に来て聞いた話ですと、鬼がこの石に手を付いて天龍川の水を飲んじゃったと、そういう伝説は昔からありました。

その大島川が牛牧と大島山の境界です。この辺の地籍を天白堂といいます。お堂が有るわけではなく、ただ天白堂といえます。

あの牛牧グラウンドの下が気持ち高いですが、あれが鐘<sup>かね</sup>鑄原です。そこは石器や土器が沢山出るんですが、子供が涎が出るほど欲しいのは綺麗な矢の根石です。子供の頃、矢の根石を拾うという授業があって、友達に形の良い黒曜石を拾



うんですが、私はいくら探しても拾えなくてくやしかった思い出があります。

高森町で縄文早期から遺物が出ているのはこの鐘<sup>かね</sup>鑄原だけです。

### 「何故鐘鑄原というの？」

それは金属、つまり鉄を作った。鉄が直接出たわけでは無く、こういう花崗岩が砂から造りますね、その砂の中に磁鉄鉱という鉱物が有ります。磁石にくっ付きます。少しの量ですよ、それでも人海戦術でも何でも良い、沢山集めた磁鉄鉱を釜で焼くんです。それが今度世界遺産になった伊豆の反射炉です。大量にやるときは反射炉を使いますが、個人でも出来ます。ちゃんと鉄が出来る。それを打てばちゃんと鋼になります。短刀などに本当に出来ます。

### 「弥生時代では今のロケットに匹敵するような最先端技術、技術集団がいたということですね」

牛牧あたりは鉄の付いた地名が多い。石原田とか赤坂とか、鉄の関係の地名が多い。私は下市田の金部という地区ですが、これも昔、技術集団が来て、田んぼを作る前の話しですが、・・・鐘井原はそのものずばりです。

「園原の炭焼き吉次という話。吉次伝説はいっぱい有るんですが、源義経を案内して平泉まで連れて行ったのもそうだし、吉次は炭を全国へ持って行ってフイゴで鉄を溶かしたんじゃないか、だから金持ちにもなるし、京都からお姫様が来り、鉄の神様という名があります」

「牛牧の伝承館を造った時、そこに木が有りますね、その木は炭焼きに良い木だということで、その向こうに金山神社というのが有りますが・・・その木の名前はどんぐり薪だと聞きました。昔の人は金木といいました。囲炉裏にくべる薪は金木が一番良いと。栗の木はパチンと爆ぜ飛んで来るが、クヌギ、檜、ぶな、桜は爆ぜなくて火力が強いというわけで、囲炉裏に焚く薪としては最高品だと」

### 「金木ってどういう字を書いたの？」

「私の家では家内といって家の中で焚く木の事でした。私の出身は阿南町です。私は大鹿の人からそういう話を聞きました。鉄を作るのに砂鉄 1 t 使えば炭も 1 t と言われます。だから相当量の山を持っていないと炭を作るのが大仕事。砂鉄はこれだけの砂が有るから・・・」

なるほど相当の炭が必要なんですね。炭の生産量は鳥取県が一番多いが、あそこの花崗岩も弱くてざらざらしていること、この地でどうやって砂鉄を浚っていたか？

## ⑩ 鐘鑄原を流れ下る市田井

では、これから大きな石がごろごろしているのを見ながら天白公園の広場へ行きます。大島川は急勾配ですが構造物で均しています。ここに排水溝が有ります。ここから鐘井原に流して磁鉄鉱を集めれば良いわけですね。ここが市田井の取水口です。このあたりは山津波で大きな石が流れて行った、砂や砂利を残していった川底だったと思います。それが300年の間に掘り下がって、これ以上下がっては困るということで、「三六災害」後の復旧工事によって河川断面を改良してダムを造ったり、川底を深く掘削して大島川を完全に人口化した。そこに不動滝線の橋が有りますが、「三六災害」では流木が橋にダムアップして、道路に溢れた。そのままでは下流の住宅が流される、ということで消防団が道路を崩して水を大島川へ落とした。その後この桜並木を作ったということです。

だからその桜並木は50年経った物です。大雨で山津波が出ると大体大きな被害を起こすのは樹木です。流木ダムを造ってしまうんです。これはすごいですよ。堰き止められた洪水は2階造りの屋根位迄高くなります。

住宅地だと、車を通す為に川を暗渠にしますとそこへ流木が詰まります。自分の家の近くに橋が有ったら気を付けましょう。橋は流木ダムを作る最大の原因になります。

歩いているといろんな情報が入ります。お百姓に会うといろんなことを教えてくれます。地元の方に聞くのが一番良いです。

## ⑪ 天白公園



この公園の広場は、元は果樹園、そこへ町がスケート場を造ったが、あっという間に砂や泥が溜まってしまって氷が張らなくなり、今は残土で埋めてしまった。

天龍川筋には天白社だとか天白に出会います。天白の字はここでは白ですが普通は伯です。人によって違います。それと、これと同じような古代信仰ですが、御射山信仰とかしゃもじとか、よくみかけます。しかし洪水の跡を調べていると天白とか御射山という名前が出てくる。それは土地に関係している。しかし証拠物件は中々出てこないの、知っている人がいたら教えて欲しいなと思います。訳の分からない神様がいっぱい出てきます。それを否定するわけでは無く、みんな土地と関係あるよということです。

⑱ では、バスに戻ります。(資料館へ帰ってまとめをしました)

大島川の上流から流れてきた砂礫が堆積して下流の集落を造りました。堂所は本流からと周りの谷から流れ出した砂礫です。役人平も同じでしょう。だから、堂所や役人平では300年前の山津波の跡を決めるのは、何代もの堆積物が積み重なっていますから、境目が分かりません。

不動滝から上に入ると、「ひつじ満水」の時に流れ出したと思うような堆積物が川筋を埋めていますし、鍋割という大きな支流がありますが、そこへ行くと山津波発生源の山の岩石が崩れ残っているかとか、その名残が残っています。「三六災害」の雨のレベルだったら「ひつじ満水」のような巨大な山津波は起こりません。ですからこの役場と中学を造っているような巨大な山津波で出来た土地の記録は残っていないでしょうが、何か大きな地震をきっかけにして出来たとも考えられます。

天竜川上流河川事務所が作ったビデオに宝永の地震が出てきます。しかし、これは私が監修したので入っていますが、



国交省ではそんなことは分かっていません。国は山や扇状地が発達してきた過程、そこまでは分かっていません。ですが皆さん、自分の生まれた地域のことはわかっていると思います。災害の経験などが身体に染み込んでいるでしょ？そういうのが大事だと思います。本やインターネットで見たことを自分の回りに当てはめることは危険です。自分の肉体や経験できちんと実証することが大事です。私の経験からそう思います。

知識というものは人から学ぶものではなくて、自分で獲得するもの、私はそう思います。何か質問や教えていただくことがありますか？

**「先生、今、屋号というのが少なくなってきましたが、下市田ノ駅の側に流れ田という屋号が有りますが、あれは未満水に関係ありますか？」**

それはあるでしょう、流れ田といいますから、あれは大島川では無くて江戸ヶ沢ですが、「南の方へ行って、間ヶ沢の下に5区と4区の境に「流れ」という屋号の佐々木さんという家が有りますが・・・」

佐々木という美容院ですか？

**「そうです。あの家は桜堂近くの羽生家の上にあったんですが、大水が出て石塔もみんな流れて行くと。その流れていった物が流れ着いたので流れとした、という話しが有りますが。」**

間ヶ沢というのはちょっとおかしい沢ですよ。おかしいというのは常日頃水が流れていない。間ヶ沢の水は堤からではなくて、一貫水路からです。90%は一貫水路の水です。大雨になると、日頃水の流れていないような沢が濁流となって流れてくる。そんな下によく橋都さんは住んでいましたね。

**「そのために家の裏に竹藪を置いてあるんですね」**

**「それで助かって、裏は3から5軒洪水で全滅したが」**

実は我が家にも小さい竹藪が有りますが、竹藪は全部土盛りをして有ります。土塁を造ったんです。どの時代にやったのか分かりませんが、そういうように細かい所を見ると、いろいろな住まい方の理由が分かります。

流れの佐々木さんの家の上には、間ヶ沢から流れてきた砂や砂礫が道の横に堆積していますね。間ヶ沢からというのは石の種類で分かります。桜堂の上の加藤さんからよく話しを聞きますが・・・

**「あそこの家名は黒竹(くろちく)といいます。今はそれを知る人もいなくなりました」**

「加藤さんが言うには、「三六災害」の時かその前か、橋都さんの方に水はみんな流れていった。

**「床下まで浸かりました。」**

床下は地面からどのくらい高いですか？

**「この椅子より高いです」**

それは昔、地主だったから、小作とか人が来たときの対応で床を高くしたというのではなくて、床下を水が流れるように高くしたと？

**「わかりません」**

それは実はあるんです、そういう家が。

高遠藩の知恵者で、塩田の中村家は旧伊那村東伊那籍地にあります。坂本天山の「墾田の碑」の書があって、見に訪れた時に聞きました。「三六災害」の災害の時に後ろの山から流れ出した砂が床下を埋めました。床下からダンプカー3台分の砂を運び出したと言っていました。だからそういう床下の高い家が有ります。床下を高くするのは2種類ありまして、地主とか階級制度を表す旧家と、家と家の間に水が流れても良いように高くする家とあります。橋都さんは高い床下と竹藪によって、何回かの洪水に耐えてきたという私の推理です。いずれにしても経験です。是非、お願いですが高森町史に出ている三界萬霊の原文を誰か知識の有る人にお願いして読みといていただきたい。